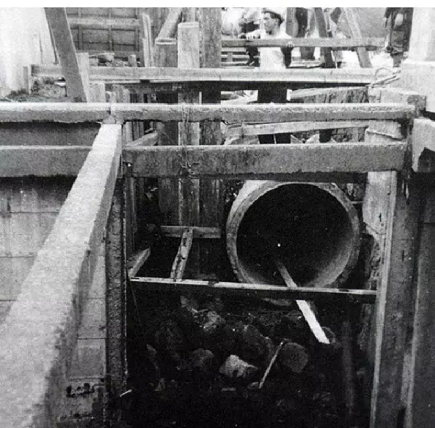


左／大正時代頃の河骨川(中央をS字形に走る溝)(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館所蔵) 右／葛飾北斎「富嶽三十六景 隠田の水車」。江戸時代、渋谷は農村だった

多くの水車がかけられ、精米が行われていた。排水と灌漑の両面から、水路は水田の維持に必要不可欠であり、自然の川の流れだけでなく、人工的に開削された水路も多くあったと考えられる。電気が普及すると水車業は衰退し、大正初期までに水車の回る風景はほとんど見られなくなる。渋谷は東側から宅地化が進み、次第に水田が減少。埋め立てられた水路は道路や線路の用地となったり、残された水路は生活排水を流す下水として利用されるようになった。宅地化に伴い、新たに作られた排水溝も数多くあった。稲荷橋上流の渋谷川水系のすべてが地表から消える転機となるのが、戦後の東京オリンピックである。渋谷川本流の下水道幹線化と並行して、その支流の暗渠工事も急速に進められたのだ。「キヤットストリート」の下を流れる渋谷川本流は、現在は暗渠になって下水として利用されていますが、水の流れは途中で専用の下水管に分かれ、稲荷橋下流の渋谷川には流れま

せん。このように一口に「川」と言っても、何を以て、どこを指して「川」というのか一概には言えないのです。人工の川もあれば、自然の流れもある。道路整備や土地区画整理、護岸の改修などで流路の変更もしばしば行われました」と田原さん。現在、渋谷区が進めている渋谷駅周辺(稲荷橋下流)の清流復活事業について「人々が渋谷川に関心を持つきっかけになれば」と期待を寄せつつも、川が辿ってきた歴史を正確に伝えていきたいと、研究活動に余念がない。



左／宇田川の支流の一つで暗渠工事が行われている様子(昭和33年)(『春の小川』の流れた街・渋谷)より) 中／小田急線「代々木八幡駅」近くの線路脇に建つ『春の小川』の歌碑 右／昭和31年、小田急線沿いを流れる河骨川(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館所蔵)

せせらぎの復活に 期待を込めて

稲荷橋上流の消えた渋谷川も復活させようという動きも起きている。NPO法人「渋谷川ルネッサンス」はパレードやフィールドワーク、電柱への掲示などを通じて渋谷川とその支流が『春の小川』の舞台であるという啓蒙活動に取り組んできた。また、シンポジウムの開催や

行政への意見書提出、溶岩パネル(※)を使った護岸緑化などを行い、実際の清流復活に向けた活動もしている。事務局長の石井健蔵さんは「経済優先・成長第一の社会から、環境との共生へと時代の流れは変わっていて、川の復活は世界中の都市で取り組まれている。外国人観光客が多く訪れる渋谷で、日本がどのような社会を目指していくのかを示すこととの意義は大きい」と語る。関

係省庁への地道な働きかけが実り、二〇二〇年の東京五輪のメイン会場となる新国立競技場の建設に合わせて、かつて付近を流れていた渋谷川本流のせせらぎが再現されることが決まった。高野辰之が『春の小川』を作詞してから百年以上が経ち、渋谷の懐かしい風景は人々の記憶から消え去った。だが、復活する清流の水音が、その記憶を呼び覚ますことになるかもしれない。



上／渋谷駅の南、稲荷橋付近の渋谷川。ここから開渠となり、下流域は古川と名を変え、東京湾へと続く左／キャットストリートの下には渋谷川本流が流れ、下水道として利用されている



上／鍋島松濤公園の池も、渋谷川水系の水源の一つ。かつては渋谷に数多くあった水車が復元されている 右／江戸の古地図には天龍寺(新宿駅南口)の池も渋谷川の水源の一つとして描かれている。池は無くなったが今なお地下水が流れており、井戸は現役



※溶岩素材をベースにした薄型パネル。細かい穴の空いた構造になっていて、水分を保持することが可能なため、植物が芽吹き、緑化につながる



左／キャットストリートに清流を再現した時のイメージ図(NPO法人「渋谷川ルネッサンス」制作) 右／渋谷川水系のフィールドワーク。川の記憶を辿っていく

江戸楽

edo-gaku

江戸を知れば、
東京は
もっと楽しい

7
2018

No.111

東京の歌

—心のふるさとを歌い継ぐ—

松平定知／「日々是歴史也」

竹内 誠／「粋に楽しく江戸ケーション」

(江戸東京博物館 名誉館長)

ルイザ ルビンファイン／「世界が見た日本橋」

高橋英樹／「七万人を斬った男 高橋英樹の歴史つれづれ帖」

定価

680円